

# 万葉集の新出断簡

田中 大士

## 一 はじめに

万葉集の伝本研究において、古筆断簡の研究は、佐佐木信綱氏によっていち早く取り組みられていた。佐佐木氏による営々とした万葉集の断簡の集積は、確実に後世に伝えられ、近年の伝本研究にも大きな影響を与えている。今日扱われる万葉集の古筆切の大部分は、佐佐木氏によって発見されたものと言つてよい。

断簡研究の最大の意義は、断片である断簡から、その全き姿である伝本の有様を推察復元することであるが、そのことを足がかりに、その作品の諸伝本のネットワーク全体の解明にもつながってゆく可能性を持っている。現在残された伝本の数が限られている中、断簡にも目を配ることにより、さらに広い視野が得られると考へている。本論文では、万葉集の断簡の内、未発表で、その本の性格を考える上で何らかの影響を及ぼしうるものを三つ選り、紹介を行う。その三つとは、春日本、伝解脫

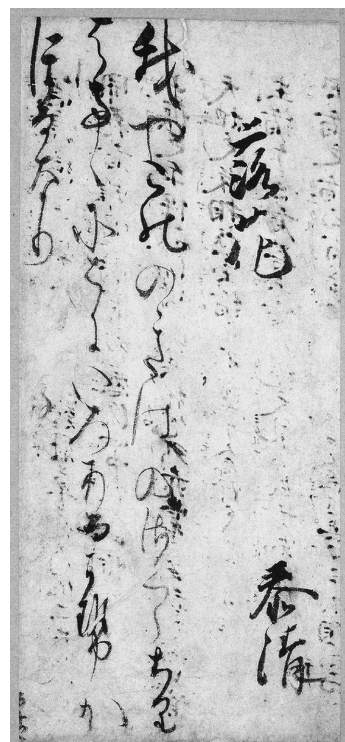
上人筆切、大字切の三種である。

## 二 春日本万葉集

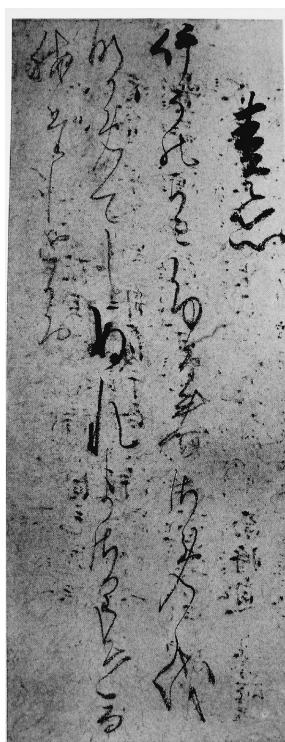
春日本万葉集は、寛元元年（一二四三）二年に、南都春日若宮社神主中臣祐定（当時。後に祐茂と称する）によって写された伝本である。非仙覚本系統の内の片仮名訓本系に属する。和歌懷紙（春日懷紙）の裏を利用して書写されており、後世その和歌懷紙の価値が重視され、裏に回つた万葉集の大部分が相剥ぎによって消失するに到つた。それでも、現在約一六〇枚の残存が確認され、万葉集としては、卷五、十、十三、十四、十九、二十の十卷の巻次が確認されている。<sup>（注一）</sup>

今回紹介するのは、奈良国立博物館の羽田聡氏のご教示によるものである。

(1) 泰清「落花」(思文閣目録平成九年二月所収)



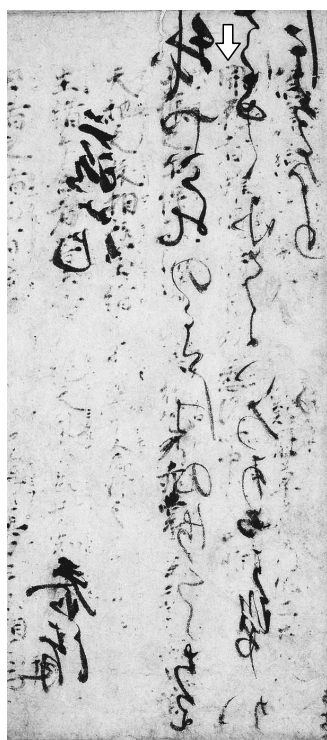
(2) 伝油小路隆蔭筆和歌懷紙(古筆手鑑「披香殿」所収)



(1) は、古書肆思文閣の目録に記載されていたものである(縦二八×横一二cm)。目録の記載通り、春日懷紙の断簡と認定できる。作者の泰清は、目録の解説にもあるとおり、大中臣泰清である。泰清の春日懷紙は他に二枚確認できる。一方、歌題の「落花」は、作者の署名との位置関係から第一歌題と推定されるが、「落花」を第一歌題とする春日懷紙としては、「落花・款冬・春恋」という三題の懷紙が一枚見られるの

みである(中臣祐有懷紙)。事例の少ない大中臣泰清の懷紙で、歌題もまたきわめて稀な懷紙ということになる。これが、春日懷紙と認定されるについては、当然紙背に文字が見られることが大きく寄与していると考えられるが、目録には、裏の文字についての情報はない。

(1) の裏の文字は、裏面に書かれているので、このままでは読みづらい。反転して画像処理したのが次の画像である。



一見、判読は難しそうではあるが、多くの事例が相剥ぎによって失われている春日本としては比較的判読しやすい事例に属する。わかりやすいのは、上の部分である。画像の右上の矢印の部分から

開花者雖

山振之介保

天地之依相

生緒念者吾

玉緒之

などの文字が見出される。これらは、万葉集卷十一の二七八五から二七八九までの歌本文と一致する。<sup>(注2)</sup> すなわち、

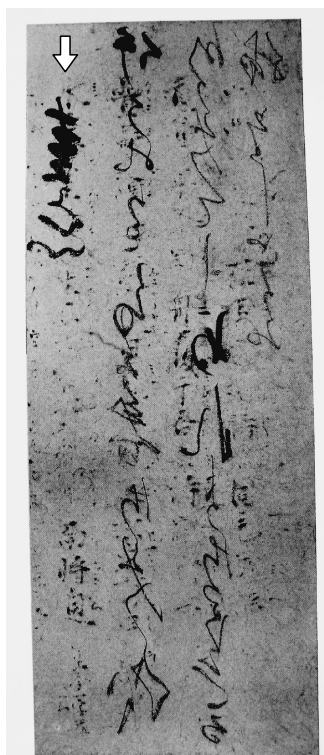
二七八五 開花者 雖過時有我戀流 心中者 止時毛梨  
 二七八六 山振之 尔保敝流妹之 翼酢色乃 赤裳之 為形 夢所見管  
 二七八七 天地之 依相極 玉緒之 不絶常念 妹之 當見津  
 二七八八 生緒尔 念者 苦玉緒乃 絶天乱名 知者知友  
 二七八九 玉緒之 絶而有戀之 乱者 死卷耳其 又毛不相為而

という具合になる（ゴチックが判読できる部分）。春日日本は、万葉集の歌本文を、短歌の場合ほぼ一首一行で書くため、右のような並びを想定できる。

一般的に考えると、判読できる部分の少ない劣悪な資料ということになるかもしれない。このままでは、校合資料としても使いづらく、十分な資料でないことは確かである。しかし、この春日日本は、現存する巻十一のたったひとつの資料なのである。春日日本は、これまで巻五・十と巻十三、十四、十九、二十の十巻しか知られていなかったが、当該切の出現により、更にもう一巻の存在が知られたことになる（この点後述）。

（2）は、川崎市市民ミュージアム所蔵の『古筆手鑑 披香殿』の一枚である（縦二八・二×横一〇・七cm）。伝称筆者は、春日懷紙より後世の油小路隆蔭（二二九七～一三六四）となっている。この古筆手鑑は、刊行されていて（平成十一年刊）、内容を精査することは容易であるが、本稿筆者は羽田氏の指摘があるまでは春日懷紙であるとは認識できなかった。断簡で残る和歌懷紙が、春日懷紙であるか否かは、まずは、作者や歌題で判断されるが、そもそも当該切には作者の表示がない。しかも、残る歌題は「春恋」と一題のみで、しかも、いたって平凡な題であり、この題から春日懷紙か否かは直ちに判断がにくい。そこで、見極

める最大のポイントは、裏の万葉集ということになる。当該切には、あきらかに漢字とおぼしきものが鏡文字の形で認められる。これを反転した写真が次である。



先の思文閣目録の画像と比べると、さらに不鮮明ではあるが、たとえば、最終行（↓）の第一字「水」や下の部分の「而将通」などから、同じく巻十一の二七七五から二七七八の部分と推察できる。先の思文閣目録の切は巻十一の二七八四から二七八九までであった。当該切裏から思文閣目録の切までは四百首しか隔たっていない。つまり、当該切裏は、春日日本でも希少な巻十一の部分であるというだけでなく、先の（1）泰清懷紙の裏ときわめて近い部分であるといえる。ならば、（1）（2）の懷紙切はともに同一の懷紙の一部分であると推測できる。春日懷紙の「落花」を第一歌題とする懷紙は、先述のように「落花・款冬・春恋」（「款冬」は、山吹のこと）の順に題が並んでいる。すると、当該の二枚の切は、

落花  
 （款冬 所在不明）

## 春恋

という順で位置していたと考えられる。一方、春日本の方は、その裏なので、万葉集の順は逆になる。懷紙面では後ろの「春恋」が先に立ち、二七七五～二七七九、第一歌題の「落花」は後になり、二七八四～二七八九という十二首、十二行分ということになる。その間は、二七七九～二七八三の五首分となる。卷十一のこのあたりには左注などはないので、春日本の行数としても五行分と推定できる。すると、現存する部分と間の空白部分を足すと十五行分ということになる。春日本は、懷紙裏一面で十八行で例外はない。<sup>(主)</sup>ならば、この懷紙裏にはさらに三行分が想定される。まず、「春恋」裏の二七七五の右側に不鮮明ながらも一行の存在が認められる。これがおそらく二七七四だと考えられる。一方、「落花」裏は、懷紙面が、署名(泰清)から始まっている。他の春日懷紙は、すべて署名の前に「詠三首和歌」などという端作りが存することから、当該懷紙も同様であつたと考えられる。ならば、その端作りの裏の部分にさらに二行あつたと推定できる。二七九〇、二七九一があつたと考えられるわけである。

右のような推定を総合すると、当該懷紙裏の春日本は次のような様相であつたと想定される。

- 1 二七七四 神南備能 淺小竹原乃 美 妾思公之 聲之知家口
- 2 二七七五 山高 谷邊蔓在 玉葛 絶時無 見因毛欲得
- 3 二七七六 道邊 草冬野丹 履干 吾立待跡 妹告乞
- 4 二七七七 疊薦 隔編數 通者 道之柴草 不生有申尾
- 5 二七七八 水底尔 生玉藻之 生不出 縦比者 如是而將通
- 6 二七七九 海原之 奥津繩乘 打靡 心裳四怒尔 所念鴨

- 7 二七八〇 紫之 名高乃浦之 靡藻之 情者妹尔 因西鬼乎
- 8 二七八一 海底 奥乎深目手 生藻之 最今社 戀者為便無寸
- 9 二七八二 左寐蟹齒 孰共毛宿常 奥藻之 名延之君之 言待吾乎

## 折れ線

- 10 二七八三 吾妹子之奈何跡裳吾 不思者 含花之穂應咲
- 11 二七八四 隱庭戀而死軀三苑原之 鷄冠草花乃色二出目八方
- 12 二七八五 開花者 雖過時有我戀流 心中者 止時毛梨
- 13 二七八六 山振之尔保蔽流妹之 翼酢色乃 赤裳之為形夢所見管
- 14 二七八七 天地之依相極 玉緒之不絶常念 妹之當見津
- 15 二七八八 生緒尔 念者苦玉緒乃 絶天乱名 知者知友
- 16 二七八九 玉緒之絶而有戀之 乱者死卷耳其 又毛不相為而
- 17 二七九〇 玉緒之久栗縁乍 末終 去者不別 同緒將有
- 18 二七九一 片絲用 貫有玉之緒 乎弱乱哉為南人之可知

古筆字の一つの常識に、ある断簡群がまとまった量出現したとき、伝本の特定の箇所、たとえば上下巻のうち上巻だけしか出現しない場合は、今後下巻の断簡の出現は期待しにくいという考え方がある。春日本の場合も、本稿筆者が十数年の間探索を重ねて、約一六〇枚の事例を見出したが、その中に先述の十巻以外の巻次には遭遇し得なかった。さきの常識に引き当てれば、十巻以外の春日日本には遭遇できないはずであった。しかし、今回たった一枚ではあるが、十巻以外の巻に行き当たったことからすれば、今後それ以外の巻次にも遭遇する可能性が出てきたことになる。春日日本を世に紹介した佐佐木信綱氏は、あるところで、裏が

卷十七の春日懷紙を発見したという報告を行っている（佐佐木信綱「春日本万葉集残簡」『万葉集の研究 第二 昭和十九年』。本稿筆者は、先に述べた十巻以外の春日日本の例がないことを根拠にこの佐佐木氏の報告への認定を保留している（拙稿「春日懷紙墨畧序説」平田喜信編『平安朝文学 表現の位相』平成十四年）。しかし、巻十一という新たな巻次が出現した以上、当然他巻の出現の可能性も大きくなったと考えられ、今はその存在を確認できない、件の裏が巻十七とされる懷紙の探索にも努力を続けてゆきたいと考えている。

## 注

- 1 田中大士編『春日懷紙（大中臣親泰・中臣祐基）』（平成二六年）に、春日懷紙（春日本万葉集）について概説がある。
- 2 本稿の万葉集の歌番号は、旧国歌大観番号による。以下同じ。
- 3 佐佐木信綱「春日懷紙裏万葉集残欠」（『万葉集の研究 第二 昭和十九年』）に、一部十行の事例があると報告されているが、注1著書（P七四）で、判読の誤りであることが指摘されている。

## 三 伝解脱上人筆切

伝解脱上人筆切の性格については、拙稿「古筆切から見た万葉集の片仮名訓本——伝解脱上人筆切の場合——」汲古第五五号 平成二二年六月）で述べている。この論は、当時残存が認められた二枚の切（いずれも石川武美記念図書館蔵 以下、石川図書館切と略称する）を対象としての考察である。そこでの結論を簡単に記せば、次の二点に絞られよう。

- 1 片仮名訓本系統の広瀬本と酷似する本文が見られる。

- 2 仙覚校訂本から移入したとおぼしき訓が付された部分が見られる。

1は、この断簡が、非仙覚本系統の片仮名訓本系の広瀬本と酷似した異文を持つという点である。前稿では、一八〇九の長歌のうち六箇所について指摘したが、そのいずれも現存伝本中、伝解脱上人筆切と広瀬本の二本のみに見られる異文で、しかもそのほとんどが誤りと考えられるものであった。このことは、二本が系統上、きわめて近い関係にあることを示唆しており、まずは、伝解脱上人筆切が、本稿筆者が言う片仮名訓本系統の一本であることが確認できる。<sup>（注1）</sup> 広瀬本は、他に春日本と同様な本文の酷似が見られ、当該の三本は、本文の近似という点で、片仮名訓本系の中でも特に近い関係にあることが判明した。

一方、2は、非仙覚本系統とは別の仙覚校訂本独自の訓が存するという点である。非仙覚本系統は、仙覚校訂本とは別の系統であり、一般的には双方に交渉はないと考えられてきた。ところが、伝解脱上人筆切には、三句にわたり、仙覚校訂本独自の訓が付された箇所が見られるのである。片仮名訓本系の諸本においても、仙覚校訂本の訂正訓が付された例は存する。だが、仙覚訂正訓を持つ片仮名訓本系の諸本にはある特徴が見られる。現存の片仮名訓本系で仙覚訂正訓を持つ本（断簡を含む）は、紀州本（訂正訓が見られるのは巻四まで）・柘枝切・後京極様切・伝弘誓院教家筆切の四種であるが、そのいずれもが、歌本文に雁金点（いわゆるレ点）が付されている（拙稿「万葉集古筆切の世界」目の眼第四三六号 平成二五年一月）。一方、仙覚訂正訓を持たない片仮名訓本系の諸本には、そのような特徴は見られない。それによって片仮名訓本系は大きく二つに分けられると考えられてきた。

ところが、この伝解脱上人筆切は、一方で広瀬本と酷似した本文を持ち、歌本文には雁金点を付さないという特徴を持ち、他方では仙覚校訂本の訓を持つという特徴を持っていることになる。このことについて、前稿では、如上の二つの特徴を併せ持つ伝本が出現したことから、この本は、片仮名訓本系統内での二つのグループの変転の様相を反映させた過渡的な性格かと推論しておいた。

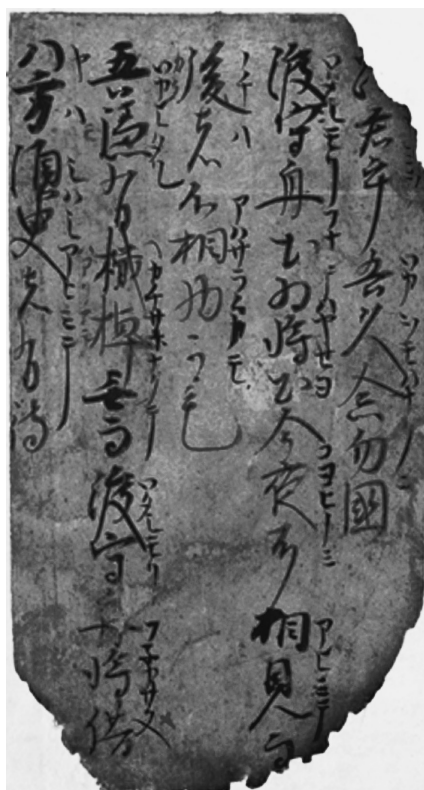
ただし、前稿では、仙覚訂正訓が存するという点にのみ指摘して、訂正訓がどのように取り込まれているかにまでは言究していなかったのだ、ここで改めて石川図書館切の仙覚訂正訓について検討してみたい。石川図書館切で仙覚訂正訓が付されているのは三箇所、第四一句の「下近置而」(シタハエヨキテ)、第六十、六一句の「親族共射 射婦集二(ヤカラトモ イヨリアツマリ)である。いずれも墨で付されており、少なくとも墨色では他の訓と区別は出来ない。先の片仮名訓本系で仙覚訂正訓を付す本の多くは朱で付訓していた事を考えると、違和感がある。

石川図書館切の場合、それらの事例とは異なった側面がある。それは、他の片仮名訓本系統の本の様相を見ると明らかになる。紀州本には、この三句にいずれも訓が見られない。一方、広瀬本では、「下近置而」の右に「シタシキヨキテ」と訓があるものの、「親族共 射婦集二(広瀬本の本文)の二句には事実上訓は見られない。<sup>(注2)</sup>つまり、石川図書館切以外の片仮名訓本系統で訓が確認できる二本の本のうち、一方には訓が見られず、もう一方でも三句中二句には訓がないということになる。片仮名訓本系統で、本来訓がない場合、どのように仙覚校訂本の訓を補うのか。そのような場合の事例は紀州本にしか見られないが、たとえば、仙覚校訂本の新点に相当する歌は、基本的に片仮名訓本系統では

訓がない。<sup>(注3)</sup>紀州本巻十までで新点相当歌は一八首あるが、その場合は、仙覚本の新点の訓を、歌本文の右側に墨で付している。また、仙覚校訂本で、歌一首全体ではなく、部分的に朱点が付されている場合の紀州本の対応はどうか。紀州本にそれに対応する事例は少ないが、たとえば巻一、五二の第二一句では、やはり墨で新点が付訓されている。石川図書館切は、まさにこの形であると考えられる。

ただし、石川図書館切で移入されているのは新点ではなく、訂正訓である。石川図書館切での他の訂正訓の扱いはどうなっているのか。当面の一八〇九の長歌全体で、仙覚訂正訓は二五句見られる。<sup>(注4)</sup>しかし、そのうち石川図書館切が取り込んでいる仙覚訂正訓は、先ほどの三句のみである。他の訂正訓が存する句は、他の片仮名訓本系統とほぼ同様の訓になっている。つまり、おそらくは、底本に訓がなかった三句だけ訂正訓を取り込み、訓が空白でない部分については訂正訓を取り込まなかったと考えられる。<sup>(注5)</sup>石川図書館切に見られる伝解脱上人切のこのような仙覚校訂本の訓の取り込み方は、片仮名訓本系統において、まずは、訓のないところに仙覚の新点や訂正訓を墨で補い、次の段階として、訂正訓を歌本文の右に補ったという順序を示唆するように思われるが、まだ証拠となる事例は少ない。そのような可能性を提示して、新たな事例発見に努めたい。

次頁に示すのは、専修大学図書館蔵の古筆手鑑『墨跡彙考』の番外として所収されている断簡である。縦一四・六cm、横七・八cmで、書写内容は、万葉集の巻十、秋雑歌の七夕歌の二〇八六の後半部分と二〇八七、二〇八八の三首を収める。周囲に焼け焦げの跡があり、損傷しているが、残存する形状から、縦は本来の寸法であったと推定される。本来は



六半、つまり、ほぼ正方形の判型であったと考えられる。番外故、伝称筆者も記載されず、いかなる出自の切かは明らかにされていない。しかし、現存する万葉集の伝本で、六半型のものはきわめて稀で、知られているものは、伝解脫上人筆切ただひとつである。先述のように、現在知られている伝解脫上人筆切は、石川武美記念図書館蔵の二枚だけである。これは、縦横一四・六cmの六半型である。少なくとも縦の寸法は同じである。ただ、石川図書館切は巻九、当該切は、巻十と収められている巻が異なる。また、石川図書館切は、一面十二行であるが、当該切は、現状が五行であり、仮に横が石川図書館切と同じ一四・九cmとすれば、全体で九行十行と推定できる。すると、両者で一行数も微妙に異なることになる。しかし、筆跡は両者でよく似ており、六半型の伝本が万葉集で大変稀であることを勘案すると、ツレである可能性は極めて高いと考えられる。また、伝解脫上人筆切の巻十の事例は、後述するように、他にも見られる<sup>(注6)</sup>。

当該切の翻刻は、次のようになる。

二〇八六 □君乎 吾久念勿國

二〇八七 渡守 舟出為將出 今夜耳 相見而

後者 不相物可毛

二〇八八 吾隱有 檣棹無而 渡守 舟將借

八方 須臾者有待

三首の歌本文は、他の本とさして異なった点は見られない。一方、訓については、非仙覚本系統の特徴が顕著である。二〇八七の第一句「渡守」(ワタシモリ)は、非仙覚本系統(元暦校本、類聚古集、紀州本)では同じ訓であるが、仙覚校訂本では「ワタリモリ」となっている(二〇八八の第三句も同様)。また同じ歌の第二句「舟出為將出」(フナテハヤセヨ)も非仙覚本系統諸本と同じ訓、仙覚校訂本では「フナテシイデム」となっている。第五句「不相物可毛」(アハサラムカモ)もほぼ同じであるが、こちらは、非仙覚本系統の紀州本では仙覚校訂本と同じ「アハシモノカモ」となっている。

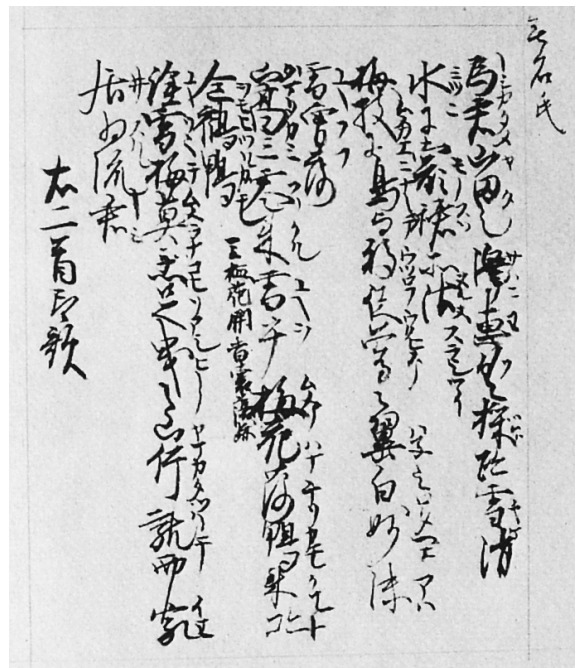
一方、二〇八八では、他本と異なった訓が目立つ。第一句「吾隱有」(ワカシタル)、第四句「舟將借八方」(フネカサヌヤハ)、第五句「須臾者有待」(シハシアヒミテ)は、この本だけの独自の訓である。また、二〇八八で注意されるのは、朱の訓が三箇所が付されている点である。

第一句「ワカ」の右横に「カク」、第四句「フネカサヌヤハ」の「ヌ」の横に「メ」、「ハ」の横に「モ」、そして第五句の「アヒミテ」の右横に「ハアリマテ」と見られる。伝解脱上人筆切と同じ片仮名訓本系の諸本には、朱の訓が付される事例が見られ（拙稿「仙覚本の訓を書き入れた片仮名訓本の性格」早稲田大学日本古典籍研究所年報第三号 平成二年三月）、もし、これも同様であるとすれば、重要な事例となる。だが、当面の朱訓は、それらとは異なるものと考えられる。朱の訓は、先述の他本とは異なつた位置に付されており、しかも、非仙覚本系統の訓が付されている。一方、紀州本や柘枝切の朱訓は、歌本文の左側に仙覚訂正訓が付されており、全く性格が異なると言つてよからう。

ところで、石川図書館切では、同じ片仮名訓本系の広瀬本と同じ誤字の共有が伝本としての性格付けに大きく関わっていたが、当該切ではどうか。ところが、当該切のある巻十の秋雑歌は、広瀬本が現存しない部分である。広瀬本は、巻十の夏雑歌の一九七六の題詞の後から巻末に到るまでが失われている。つまり、広瀬本は、巻十の七割近くが現存しないことになる。よつて、当該切では広瀬本との比較は不可能である。

しかし、伝解脱上人筆切の巻十の部分を広瀬本と比較しうるでたてが残されている。それは、『校本万葉集』新増補・追補（平成六年）の「万葉集諸本並びに断簡類の解説」の伝解脱上人筆切の項である。ここで、同書十七の諸本輯影の第七十六の「橋本経亮影写無名氏切万葉集切」に言及し、この影写切が伝解脱上人筆切を写したものであると指摘している。この影写切を諸本輯影から転載すれば、次のようになる。

この影写切は、現在所在がわからず、『追補』の時点でも、諸本輯影の画像だけからの検討であることが断られているが、形態から六半型であるとおぼしく、筆跡も似ていることから、『追補』の見解は首肯でき



ると言えよう。翻刻を示せば、次のようになる（この切の校異は、『校本万葉集』には採用されていない）。

一八三九 キミカタメ ヤタノサハニ  
為君 山田之澤 恵具採跡 ユキケ  
ミツニ モリスツメス  
水尔 裳裾所沾 スラシツイ

一八四〇 ムメカエニ ナキテウツロフ ウクヒス  
梅枝尔 鳴而移徙 鶯之 翼白妙尔 アハ  
ユキツフ ユキツフ 雪曾落

一八四一 ヤマタカミ フリクルユキヲ ムメハナ チリカモケルト  
山高三 零来雪乎 梅花 落鴨来跡  
ヨモヒツルカモ 念鶴鴨 一云梅花 開香裳落跡



一八四二 除雪而 梅莫戀 足曳之 山片就而 家

ユキヲキキテ  
ムスメヲコヒテ  
アシビキ  
ヤマカタツキテ  
イヌ

右二首答歌

この影写切では、訓の脱落が目立ち、一八三九の第二句「ヤマタノサハニ」の「マ」、第四句の「ユキケノミツニ」の「ノ」、一八四〇の第五句の「アハユキソフル」の「ル」などが脱落している。また、一八三九では、第五句の下に「スラシツイ」と見える。これは、おそらく「ヌラシツ」の誤りで、第五句の他本の訓を示したものと考えられる。一八四一の第五句の下には、「一云梅花 開香裳落跡」と異文表示があるが、これは諸本と同じもので、訓がない点是非仙覚本系統諸本と同様である。さらに、一八四一・二左注は、「右二首答歌」となっているが、「答歌」の部分は、諸本「問答」とある。この本独自の誤写かと思われる。

この影写切の部分は、広瀬本が現存するのだが、右に示した当該影写切の訓の脱落や「答歌」のような誤りを共有する事は無く、特に広瀬本との強い結びつきが感じられる点は見出せない。石川図書館切では、広瀬本の明らかに誤っている本文を伝解脱上人筆切が共有していたことが二本の結びつきを証明したのだが、影写切の部分には、広瀬本にそのような誤った本文が見られない。そもそも広瀬本巻十の残存部分には、巻七や巻九に見られるような誤った本文はほとんど見られない。残念ながら巻十においては、伝解脱上人筆切と広瀬本との近い関係を見出すことは出来ない。

広瀬本以外との関係では、一八三九の第五句は、非仙覚本系統の多くの本は、異文表示の如く「モスヌラシツ」であるが、当該切は「モノスヌメヌ」である。これは、非仙覚本系統のうち、類聚古集と合致し

ている。

以上、伝来の少ない伝解脱上人筆切の巻十の新出の断簡と従来あまり触れられることがなかった巻十の模写切を紹介する次第である。

注

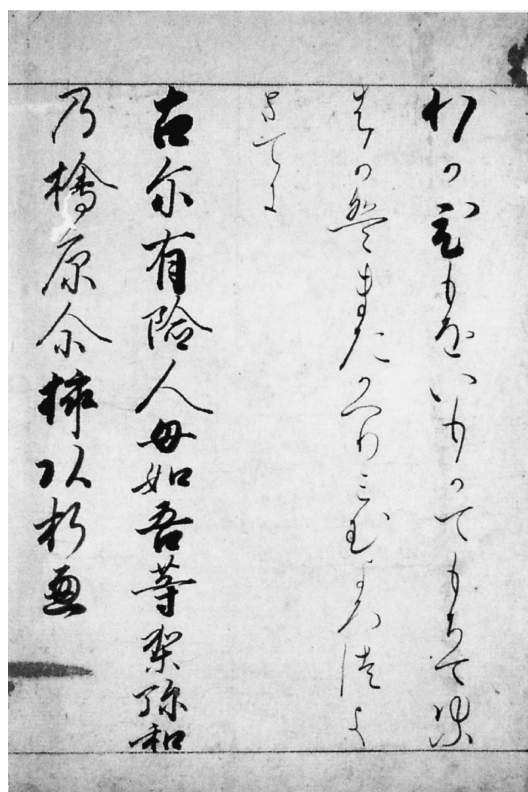
- 1 非仙覚本系統の片仮名訓本系統については、拙稿「長歌訓から見た万葉集の系統」(和歌文学研究第八九号 平成一六年一二月) 参照。
- 2 広瀬本の「親族共 射姉集二」には、上の句だけ「ナカキヨシ」の訓があるが、これは、続く「永代余」の訓「ナカキヨニ」を誤って付訓したものと考えられ、当該部分の訓とは言えない。
- 3 仙覚校訂本で、歌一首全体ではなく、部分的に朱点が付されている場合の紀州本の対応はどうか。紀州本にそれに対応する事例は少ないが、たとえば巻一・五二の第二二句では、墨で、新点が付訓されている。
- 4 仙覚校訂本の紺青訓の認定の仕方は、現在の所十分には確定していない。本稿では、便宜的に、仙覚文永本系統の伝本のうち、西本願寺本で紺青訓が認められ、かつ、大矢本、京大本いずれかに紺青訓があった場合を紺青訓としている。
- 5 後出の巻十の二枚については、双方とも仙覚訂正訓相当の箇所は見られない。
- 6 本文で示した影写切の他に、佐佐木信綱『万葉集事典』(昭和三十一年)に「伝解脱上人筆切巻十 一葉 古鈔」の項があり、個人所蔵の巻十の断簡があることが報告されている。それによれば、寸法は、縦四寸九分(約一四・八cm)、横四寸八分五厘(約一四・七cm)、はじめの二行が失われ、現状九行、秋雑歌の冒頭部分とのことである。ただし、本稿著者は、この断簡の存在を確認できていない。

#### 四 大字切

大字切は、巻七の歌本文だけが写されたものが二枚だけ残されている断簡で、きわめて情報量が少ない。この断簡を初めて紹介した佐佐木信綱氏は、例えば『万葉手鑑』で次のように述べている。

万葉集巻七の歌を大字で書いてあるので、仮にしか名づけた。本文のみで、訓のあるものを見ない。恐らくは、習字手本などのために抄出したものであらう。縦九寸二分。

『校本万葉集』首巻、同書諸本輯影（昭和七年）、『奈良之落葉』（昭和一六年）『万葉集事典』（昭和三二年）などにも紹介されているが、ほぼ同じ内容である。以降、春名好重『古筆大辞典』（昭和五四年）、小松茂



美『古筆学大成』（平成二年）などにも紹介されているが、残存するのが二首、二枚であるため、ほぼ同じ分析が行われている。中では、『古筆学大成』で、本来訓がない本であったのではないかという推測が従来から一歩踏み込んだものと認められる程度である。<sup>（注1）</sup>ところが、上のような断簡が出現した。

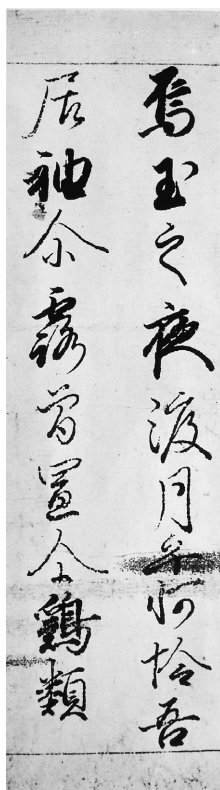
これは、西本願寺所蔵の古筆手鑑『鳥跡鑑』所収の断簡である。当面の手鑑は、正式に全体の調査が行われていないこともあり、各断簡に番号などは付されていない。極めは、「為家卿」とある。料紙には金の雲が見え（左下）、上下に界線が引かれている。右側の平仮名が巻七、一一三の訓、左側が同じ巻七、一一一九の歌本文である。この断簡の様相は、上下の界線、金砂子の雲、漢字の筆跡など大字切と共通する特徴が多い。が、従来の大字切とはいささか異なる点がある。それは、平仮名の訓がある点。なぜならば大字切の大きな特徴は、訓が見られない点にあるはずだからである。では、従来の大字切（縦二七・九cm）に対して、当該切の大きさがどうか。ところが、この『鳥跡鑑』自体の調査がかなわず、寸法は不明のままである。次善の方法として、従来知られている切との画像による比較を試みた。

大字切で画像を比較する際、注意しなければならない点がある。従来知られている断簡は、現在二枚とも所在不明である。したがって、『校本万葉集』『奈良之落葉』などで見られる画像に頼るしかない。次の通りである。

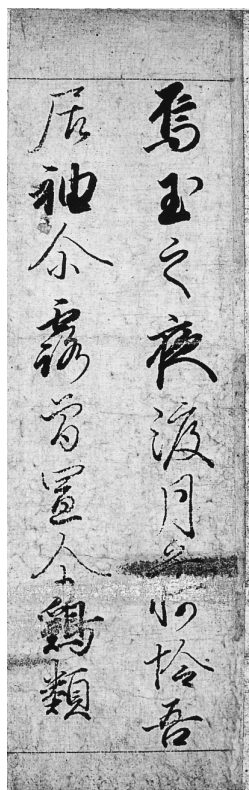
(1) 校本万葉集・諸本輯影所載



(2) 奈良之落葉所載

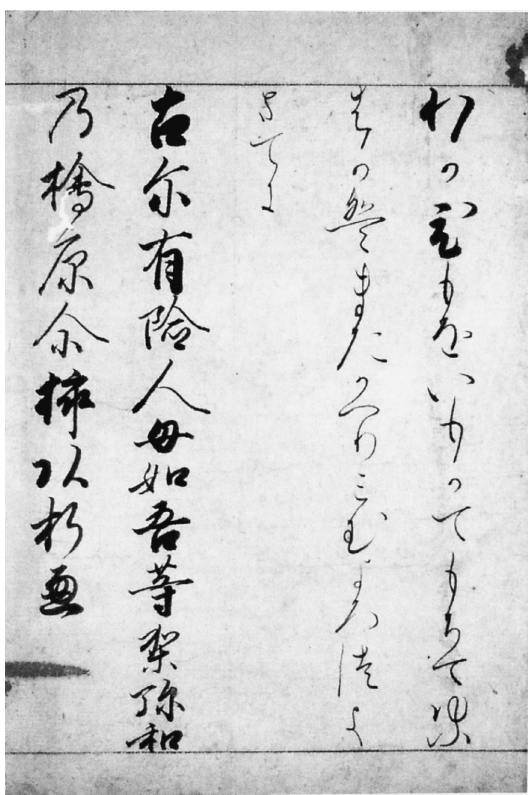
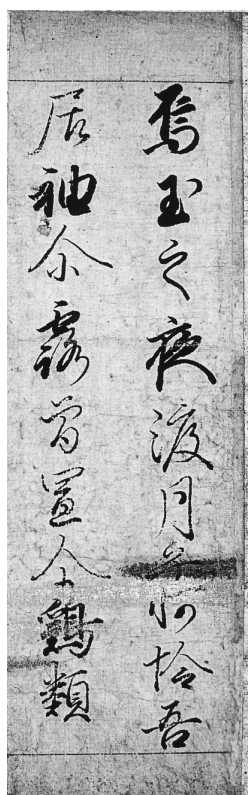


(3) 架蔵写真



右は、知られている大字切のうち、関戸家蔵とされている切の画像である。(1) (2) は、それぞれ『校本万葉集』諸本輯影、『奈良之落葉』の画像である。(3) は、本稿著者が某家で調査を行った際（現在は所

蔵されていないとのこと）、所蔵者からいただいたコピーをもう一度撮影した写真である。縦の寸法が同じになるように処理している。もちろん同じ切を写した写真であるので、ほぼ同じ内容であるが、(3) の画像は(1) (2) に比べて上下の界線の間が短いことに気付かされる。よく見ると、(3) だけ上の界線より上部が広い。(3) は実物のコピー



である故、上下の界線の余白は正確である。ならば、それとは異なる(1)(2)は、上の界線の上端が切り取られるなどのトリミングがされているということになる。さらに言えば、『万葉手鑑』の画像は、トリミングがさらに著しい。大字切のように、ゆったりと書かれ、料紙に余白が多い場合、写真画像のトリミングには注意が必要である。

では、界線の上下が正しく写されている断簡の画像と『鳥跡鑑』所収切とを比較するとどうなるであろう(前頁下段)。

両者の上下の界線を同じ長さに調整すると、界線の上部も下部もほぼ同じ長さになる。料紙に対して界線の位置がこのように合致することはとうてい偶然では考えられない。『鳥跡鑑』切にも関戸家旧蔵切と同じ銀の雲が見られ、筆跡もよく似ているので(両者の「余」はことによく似ている)、両者はツレと考えられる。『鳥跡鑑』切を翻刻すると、次のようになる。

わかひもをいもかもちてゆふ

はかはまたかへりこむよろつよ

までに

古尔有險人母如吾等架弥和

乃檜原尔挿頭折兼

右が一一一四の訓、左が一一一八の歌本文とおぼしい。ともに万葉集巻七の部分である。では、『鳥跡鑑』切からいかなる事がわかるのであろうか。最も重要な点は、大字切に訓があることである。当該切は、二首の歌が並んでいるが、右側に平仮名の歌、左側に漢字の歌の順に位置している。これは、万葉集の伝本によく見られる平仮名別提訓の付訓形態を示唆する形と言える。つまり、この断簡の前後は、前に一一一三の

歌本文があり、後ろに一一一九の平仮名訓があるという形が想定される。大字切は、従来、歌本文のみの断簡が二枚知られているだけであったし、他の万葉集の伝本に対して大ぶりな字で書かれていることもあり、本来訓のない本だったのではないかという推定も存した。仮に訓がない本であった場合、万葉集の伝本としてはきわめて稀なものと考えられる。<sup>(注2)</sup>ところが、平仮名別提訓であることが判明し、さほど奇異な伝本ではないことがわかったという次第である。もう一つ、当該切で隣り合った歌は、万葉集では隔たった位置にある点である。同じ巻七ではあるが、一一一三、一一一九と離れた位置の歌である。これは、とりもなおさず大字切が抄出本であることを示している。従来、抄出であることは推定されていたが、実態から確認できた意味は大きい。

すると、次には、いかなる歌を抄出したかということが問題になる。大字切三枚で見られる歌は、一〇八一、一〇八四、一一一三、一一一九の四首である。いずれも巻七の歌である。今のところ、この四首とびつたり一致する抄出を見出すことは出来ない。だが、一つの手掛かりはある。当該切は、先述のように伝称筆者は「為家卿」、すなわち藤原為家となっている(なお、以前から知られている断簡は、いずれも伝称筆者不明である)。これに関して、想起されるのは、為家らの御子左家の歌書における万葉集の抄出である。それは、『五代簡要』など一連の歌書に見られる。『校本万葉集』新增補・追補(平成六年)の「広瀬本万葉集解説 附録」において、広瀬本など冷泉本系統の諸本には、歌の肩に摘出語を掲げるものがあり、それらは、御子左家の『五代簡要』(同書では『万物部類倭歌抄』と呼称する)・『万葉集佳詞』などの歌書とよく合致することを指摘している。それらを参考にしながら、次に巻七の抄出歌の歌番号を提示する。番号は、『五代簡要』を中心にして提示して

いる。

- 一〇六八
- 一〇七〇
- 一〇七一
- 一〇七三
- 一〇八一（五代簡要・広瀬本・万葉集佳詞なし）
- 一〇八三
- \*一〇八四（広瀬本・万葉集佳詞のみ）
- 一〇八七
- 一〇八九
- 一〇九二
- 一〇九五（万葉集佳詞なし）
- 一〇九八
- 一〇九九（広瀬本なし）
- 一一〇二
- 一一〇五
- 一一〇七
- 一一〇八
- 一一〇九
- 一一一四
- 一一一八
- 一一二〇
- 一一二一（広瀬本なし）

（『五代簡要』万葉集卷七の抄出（広瀬本の適句・『万葉集佳詞』）

参考『校本万葉集』新增補・追補「広瀬本万葉集解説 附録」

大字切四首の内、一〇八七、一一一四、一一一八の三首は抄出に含まれる。ところが、一〇八一だけは、右の歌書三首のいずれにも含まれない。右の抄出は、三首の歌書によって必ずしも全部が抄出されていない場合がある点注意されるが、一〇八一は、三種ともに抄出されていない。では、抄出と重なる三首はどう考えればよいのであろうか。巻七の歌数は三五〇首、そのうち抄出されている歌は九七首。全体の二七・七%である。この数字からすれば、抄出歌四首中三首が合致するにはそれなりの関係性が考えられるが、完全に合致しない点はどうしても気に掛かる。大字切と御子左家の右の歌書との関係は、更に探求すべき事と考えられる。

# 注

1 『古筆字大成』第二二巻「筆者未詳 大字万葉集切」の解説では、次のように記されている。

料紙は金銀の砂子や霞を撒いて、装飾を加えている。おそらく、調度手本として真名歌のみを抄写したものであろう。

2 清水克彦「古万葉切覚え書き」（女子大国文第一四三号 平成二十年九月）では、巻二、一〇六―一〇九の訓のない断簡を紹介している（元は粘葉装とのこと）。

〈付記〉

本稿をなすに当たり、春日本については、京都国立博物館の羽田聡氏、株式会社思文閣の故長田岳士氏に多大な恩恵を受けた。また、川崎市市民ミュージアムからは、画像掲載の許可をいただいた。

伝解脫上人筆切については、専修大学名誉教授小山利彦先生のご教示を得た。専修大学図書館から画像掲載の許可をいただいた。

大字切については、西本願寺から画像の掲載許可をいただいた。

この断簡の発見は、久保木哲夫先生の主催する手鑑研究会での手鑑『鳥跡鑑』輪読において得られた知見である。

お世話になった方々に深く感謝申し上げます。